



IDIOTICA

阿呆物語

阿呆編

湖南徹

餅つき

(ペッタン、ペッタン、ペッタン…)

俺は餅をついていた。

(ペッタン、ペッタン、ペッタン…)

餅つきは大変だ。単に腕力があればいいという訳ではない。身体の柔軟性も必要だ。

「これくらいでいいんじゃないですか？」

と、助手が言う。

俺は手を止め、助手の顔を蹴り上げた。

「馬鹿！ 『これくらい』で満足するなら最初からやるな！」

「は、はい……」

「よし、再開だ！」

(ペッタン、ペッタン、ペッタン…)

出来上がったか？ いや、もう少し。

どうせ出すなら、きちんとしたものを出したい。水準以下のものを出すのは、プライドが許さない。

「あの、もういいと思います」

と、助手が言う。

俺は手を止め、助手の顔を数十回にわたって蹴り上げた。

「馬鹿！ お前が勝手に決めるんじゃない」

助手は、折れた歯をペッペッと吐き出すと、

「は、はい……」

「よし、再開だ！」

(ペッタン、ペッタン、ペッタン…)

そろそろだな。あと一息だ。

その時、背後から声がした。

「な、何でこんなところに兎が？」

俺は無性に腹が立った。

「勝手に声をかけるな、アホ！」

と、俺は叫ぶと、見るからに動き難そうなスーツを着た二人を殴り飛ばした。

スーツを着た二人は後方に数十メートルも吹っ飛んだ。

ニール・アームストロングとバズ・アルドウィンは、月面着陸直後に「兎がいて、何かを打っている」と報告したが、NASAジョンソン宇宙センターの管制センターは、「アホな報告は止せ」と一蹴した。

このやり取りが公開される事はなかった。

明るい話

お先真っ暗である。

新聞も暗いニュースしか記載しない。

『アフガニスタンで紛争勃発。周辺諸国にまで拡大する恐れ』

『東京株式市場で全銘柄大幅下落。世界同時株安に発展か』

『ソウル市明洞地区で大規模火災発生。死傷者五〇〇名か？』

『全国失業率史上最悪。一〇パーセント越え目前』

『大手建設業の〇〇組経営破綻。連鎖的破綻の可能性あり』

『中国でクーデター未遂。首相と副首相が死亡か？』

『米国東沿岸部が超大型台風により浸水。死者行方不明者数千名』

『犯罪発生率急上昇。凶悪犯罪が前年の倍』

……等々。

私は溜息をついた。たとえ嘘でもいいから、明るいニュースを掲載出来ないのか。ニュースが明るくなったくらいで、どうにかなる訳ではないが。

最近、普通の人間が普通に暮らす事が難しくなっている。

私は新聞を畳んだ。奥の壁掛け時計に目を向ける。昼休みもそろそろ終わり。これ以上落ち込む前に、仕事を再開するか……。

「ちょっと」

と、背後から声がかかる。

私は振り向いた。

上司の芝原が手招きしていた。私より一〇〇倍も健康そうな男だ。一〇も年下だから、当然か。目つきも一〇〇倍悪い。ここまで目つきの悪い男が、何故営業部に所属しているのだろうか？

「何でしょう？」

「こっちへ」

芝原は会議室へ向かった。

私は後に続いた。後に続くしかなかった。

会議室は無人だった。丸テーブルと椅子が、狭苦しい空間を一層狭苦しくしている。

こんな部屋でまともな会議が出来るものか、と毎回のように思う。

芝原は会議室のドアを閉じ、私を無言で見つめた。

私は、芝原が椅子に向かうのを待ったが、彼はその様子を見せなかった。壁に寄りかかるだけだ。腰を下ろすまでの事でもない、と考えたらしい。

「あの、何でしょう、課長？」

「クビだ」

「え？」

「あんたはクビだ」

私は凍った。

「クビ、て……。解雇でしょうか？」

「そうだ」

自分の成績がこのところ落ちっぱなしだったので、全く予期せぬ事ではなかったが、やはりショックだった。全身が汗でずぶ濡れになる。

「その……。いつまでにここを出なければならぬんでしょう？」

「今日までに」

私は卒倒しそうになるのを辛うじて堪えた。

「きょ、今日、ですか？」

「そうだ。今日。明日はもう来なくてもいい」

「ですが……」

何の事前通告も与えずに解雇するのは、労働基準法で禁じられているのでは？

芝原は、私の思考を読んだかのように、

「今日辞めれば、退職金を上乘せしてやる。それでいいだろ？」

と、冷たく言い放つ。

「再就職の目処が全くないまま解雇されると、困ります」

「こっちはリストラが進まない困るんだ。あんたさ、家族はいないだろ？」

「息子が一人……」

「既に独立してるんだろ？ 福岡、いや、小倉にいたりとか。奥さんはいない。つまり、あんたは一人だ。家族持ちだと本人以外にも困る奴が出てくるから、こっちとしてもクビを切り難い。しかし、あんたは独り者だから、困るのはあんただけ。だからいいだろ？」

最近は、普通の人間が普通に暮らす事が困難になっているどころか、不可能になってきている。

私は、汗を滝の様に流し続けていた。

「でも、困ります」

借金がまだ残っているのだ。

芝原は、私の右肩を掴んだ。

「だから、言ってるだろ、退職金を上乗せしてやる、て。あんたはこの会社で二五年も勤めている。退職金も半端じゃない。それを上乗せしてやるんだから、クビになっても暫くは食っていける。のんびりと次の職を探せばいい。それとも、今、ここで解雇の通告をして、月末に解雇宣告してもらいたいかな？ その際は、退職金の上乗せはないぜ。もしかしたら減額されてるかも。大幅にな。それでもいいのかな？」

減額されているかも、ではなく、確実に減額されるだろう。

「それも困ります」

「じゃ、今日辞めるんだ」

「しかし……」

芝原は、私の両肩を掴んだ。

「会社の為なんだ。今、大変なのは知ってるだろ？ 分かってくれよな」

会社の業績が四期連続して前年を大幅に下回り、赤字経営が続いている事は、知らされていた。破産は時間の問題だと。

そういう意味では、倒産する前に辞め、退職金をきっちり貰うのも、一つの手ではないか……

「……は、はあ」

芝原は、眩しい程の笑顔になった。ああ、こいつは偽善に満ちたこの笑顔のお陰で営業の仕事が出来るのか、と私は納得した。

「よかった、よかった。あんたなら理解してくれると思ってたんだ」

全然理解してません、と私は反論しそうになったが、口を噤んだ。

「じゃ、今から机を片付けてくれ。仕事はもういいから」

私は平手打ちを浴びせられた気分になった。

「で、でも……」

「片付けが終わったら、帰宅してもいい。じゃ」

と、芝原は言い残すと、会議室を去った。

私は呆然と立ちつくした。

普通の人間が普通に暮らす事さえ許されない。

こんな事があっていいのだろうか。

お先真っ暗である。

思えば、私や、私の血縁の人生は、常に暗かった。

* * *

父は、私が生まれる前に母と別れた。別の女の元へ走ったらしい。父と会った事は一度もない。写真もなかったので、どんな姿か想像すら出来ない。想像したくもなかった。今、どこでどうしているのか全く知らない。

母は、父が去った後、たった一人で私と四人の兄姉の面倒を見なければならなかった。現在でも女手一つで五人の子を育てるのは生やさしい事ではない。女性の社会進出がまだ一部の団体による掛け声に過ぎなかった当時となれば、尚更である。生活は常に困窮していた。家の中を探し回っても合計で一万円以上の現金がある事は、一度もなかったと思う。一日にまともな食事が一回出来れば良い方で、まともな食事が二日に一度、あるいは三日に一度、というのも珍しくなかった。

それでも五人の子が全員普通で、手が掛からなかったら、母の苦勞もいくらか軽減されていただろう。

上の兄と下の姉は、普通ではなかった。学生の頃から年中警察のお世話になっていた。母はその度に警察署へ出向き、事件担当者らの前で号泣しながら土下座した。そんな母の哀れな姿を見ても、二人は反省の気配も見せず、翌週――下手すると翌日――にはまた問題を起こして補導されていた。その内二人とも少年院行きとなった。が、その程度で更正する二人ではなかったので、出所後も問題を起こし続けた。

上の兄――正一――は、暴力行為を犯す為に生まれてきた様な人間だった。小学生の頃から家族に暴力を振るい始めた。母は勿論、私や兄姉も生傷が絶えなかった。それから間もなく家族以外の他人にも手を出すようになった。相手が女だろうと、子供だろうと、老人だろうと、暴力を振るった。

私は、長兄に殴り飛ばされる度に思ったものである。正一は大人になってもこんな愚かな事を続けるのか、と。

その疑問は応えられないままとなった。正一は、成人する事なく他界したからだ。

高校三年の時、正一は少年グループ同士の鬪争に巻き込まれ、刺殺された。ナイフの傷跡は数十ヶ所にも及び、致命傷を与えたのが誰であったのか、結局分からずじまいだった。

「不良が一人くたばったくらいで、何故我々が動かなきゃならないんだ？ 社会のゴミが一人減ったんだから、いいじゃないか。食い扶持が一人分浮くのだから、その意味でも大助かりなのでは？」

警察は、遺族の前でこう言い放ち、事件捜査に消極的であった事も、助けにならなかった。

母は、長兄の死を大いに悲しんだ。たとえろくでなしでも、自分が腹を痛めて産んだ子だったのだ。母は毎日の様に墓参りに行った。私自身は、警察が言った通り、寧ろ殺されてよかったのでは、と他人事の様になっていたが。

下の姉――和子――は、万引きや恐喝など、せこい犯罪で少年院の出入りを繰り返した。成人後は監獄を出入りした。今も監獄にいる。職場の金を盗み、二年の実刑判決を言い渡されたのだ。防犯カメラの真ん前で盗みを決行したという。捕まえて下さいと言わんばかりに。何故和子はそんな愚かな真似をしたのか。

思えば、彼女は半生を塙の中で過ごしている。和子にとっては、あの狭くて不自由な空間の中こそ極楽で、広くて自由な娑婆は地獄でしかないのかも知れない。

一方、もう一人の兄――清二――は、遺伝子のいたずらか、と疑いたくなる程優秀だった。容姿も、男女問わず一目惚れする程だった。女子に追い回されて困惑した顔をする清二を、私は歯ぎしりして妬んだものである。清二は、学校の成績もダントツだった為、奨学金が得られた。東京の一流大学へ行けると。その知らせを聞いた母は、歓喜の涙を流していたのだが……。

上京直前に、清二は飲酒運転による事故に巻き込まれ、呆気なく死んだ。我が家の期待の星が消滅したのである。

母の嘆き方は、正一の時とは比べものにならなかった。朝、昼、夜……と一日三回も墓参りに行く様になったのだ。

もう一人の姉――享子――は、私と同様、地味な存在だった。中学を卒業すると就職し、数年後に職場の男と結婚した。ごく普通の生活を送っていたが、長く続かなかった。彼女の夫が知人の借金の連帯保証人になったが故に、多額の借金の返済を迫られるようになり、夜逃げする羽目になったのである。一五年も前の事だが、消息は未だに不明だ。享子には二人の息子がいた。下の子は現在二〇歳になる筈。どこで、どうしているのか。あるいは、とっくにこの世の者ではなくなっているのか……。

母はこの世にいない。五年前のある日、突然心臓発作で倒れ、そのまま息を引き取った。六六歳だった。医療技術が発達している現在、六〇代は『老人』と呼ばなくなっている。しかし、母は死んだ。幸福感を一度も味わう事なくあの世へ旅立ったのだろう。良かった事といえば、人生があまりにも過酷だった為、死が現世からの解放になった事ではなからうか。

* * *

私は、自分で言うのも変だが、真面目だった。正一や和子と違い、警察の厄介になった事は一度もない。目立たない存在だった。良い意味でも、悪い意味でも。『普通』という言葉が自分以上に当てはまる人間はいないだろう。

学校の成績も最低ではなかったが、飛び抜けて良い訳でもなく、中学卒業後は進学する事なく就職した。

現在は、学歴は全てではない、という掛け声が飛び交っているが、当時は学歴こそ全てだった。中卒より高卒が優遇され、高卒より大卒が優遇され、更に二流大卒より一流大卒が優遇された。

中卒の私は、会社にとってゴミ人間同然だった。賃金は無論最低。いつまで経っても出世出来ず、後から入社してきた若い連中に次々越される有様だった。

幸せを掴むチャンスは何度もあった。いや、積極的に掴もうとした。しかし……。

その度に選択を誤った。まるで悪魔が私の手を掴み、悪い方へ悪い方へと導いたかの様に。

妻——元妻——が、いい例だろう。地味で退屈な自分に見合った女を伴侶として選んだつもりだったが……。

贅沢好きで、金遣いがあそこまで荒いとは夢にも思っていなかった。何故妻は私みたいな普通の男を結婚相手に選んだのか、とってしまう。妻は、私の給料だけでは十分な贅沢が出来ないと知ると、躊躇なく高利貸しの元へ走り、借金した。返済が迫ると、決まって稼ぎの少ない私を罵倒した。

振り返ってみると、結婚生活が一二年間も続いたのは奇跡というしかない。私は自分自身の家から追い出された。妻が作った借金を背負って。

離婚後も、暮らしは一向に良くならなかった。借金の返済や養育費の支払いなどで、寧ろ悪化した。私は子供の時と同様、まともな食事は一日一回、時には二日に一度という日々を送った。

普通の生活だけを望む普通の人間なのに、願いが叶えられない。

お先真っ暗である。

* * *

私は会議室から出て、自分の机を片付け始めた。いざ辞めるとなると、家に持ち帰るもの等殆どない事に気付く。この会社にいた二五年間は結局何だったのか、と嘆きたくなった。

「あれ、どうしたんです？」

と、同僚の馬淵が明るい笑顔で問う。同僚といっても、二〇も年下だ。精力は私の一〇〇〇倍はある様に感じる。

私は何と答えればいいのか、必死に考えた。

「その……、会社を辞める事になりました」

「今日、ですか？」

「ええ」

馬淵は頭を掻きながら、

「それは知らなかったなあ」

こっちだってほんの一〇分前まで知らなかったから当然だ、と私は言い返す代わりに、

「色々お世話になりました」

「そんな悲しそうな顔をしなくても。まさか、明日はもう来ない、なんて訳じゃ……」

私は無理矢理笑顔になると、

「そういう事になりますね」

馬淵の顔から笑みが消える。自主退職でないのを察した様だ。

「そうでしたか。えーと、その……、寂しくなりますね」

「死にたくなる程寂しくなります」

「そうですか。じゃ、仕事があるんで」

と、馬淵は言うのと、私から足早に離れた。自分にまだ仕事があるのかどうかを確認しに向かったらしい。

私はその後ろ姿を見送りながら、溜息をついた。

普通の人間が普通に暮らせない。

お先真っ暗である。

* * *

会社を解雇されてから二ヶ月。

再就職の当てはなかった。

当てがある訳ないのだ。普通の、何の取り柄もない中年男を、誰が雇うのか。

退職金で借金を完済出来たのが、せめての救いである。

過去も暗かったし、現在も暗いし、将来も暗い。

ただただ普通に暮らしたいだけなのに、それも許されない。

暗い人生だ。

だからせめて……。

自分が過ごす部屋を明るくしたい。自室まで暗かったらやっていけない。

私は照明器具を買った。

ただの照明器具ではない。特別注文の器具だ。

灯台で使われているBV-2型メタルハイドランプとレンズ。特製レンズが、四〇〇ワットの電球によって発生する光を、二〇〇万カンデラにまで引き上げる。

一〇〇ワットの白熱電球の場合、光度は約一三〇カンデラだから、私が購入した照明器具は、単純計算で白熱電球一万五〇〇〇個分の明かりを発せられる事になる。光達距離は二〇海里（約三万七〇〇〇メートル）で、新聞なら一〇〇〇メートル離れていても問題なく読めるという。

私は、照明器具を部屋の中央に設置した。元々狭い部屋が、一層狭くなった。

高さ一・五メートルの照明器具を見つめる。ベネチア産のガラス細工の様でもあり、美しい。

一周した後、点灯してみた。

「うわっ」

室内が、目を開けていられない程明るくなった。放熱も凄い。壁や天井が焦げる程だ。何もかも白く染まる。

私は足を踏ん張った。レンズから放たれる光はまるで質量のある物体の様にも思え、踏ん張っていないと後方に吹っ飛ばされそうな感じがするのだ。

爽快な気分になった。

電気料金は月数十万円にもなるだろうが、それでもいい。暗い人生なのだ。自分の部屋くらい明るくしなければ。さもないと、普通の間人である事さえままにならない。

メタルハイドランプは室内を照らし続けた。

これは最高だ、と私は思った。

二基目を注文する事を、その場で決めた。そうすれば、光度は四〇〇万カンデラになる。私の部屋はもっとももっとも明るくなる。部屋を床から天井まで鏡張りに改装しよう。

二つの電球の間に座れば、私は死ぬ程眩しい明かりに包まれるのだ。

これで私は普通の、どこにでもいる、全く目立たない人間でいられる。

暗い暗い人生における唯一の光。

私は腹を抱えて笑った。何だ、自分もまんざら捨てたものではない、と。

暗い、暗い、とぼやくだけで何の手も打たない連中は、単なる無能者である。

馬鹿が入水自殺を試みるとこうなる

本郷浩は、多摩川に踏み込んだ。

暖冬とはいえ、一二月の川水はやはり冷たい。

ほんの数秒で両足が痺れてきた。

その冷たさにお構いなく、本郷浩は前へ前へと進んだ。

死にたかったからだ。

仕事も、プライベートも、上手くいっていない。

職場では、上司は勿論、同輩や後輩からも「お前は底無しの馬鹿だ」と罵られた。

漸く出来た恋人からも「あんたみたいな馬鹿とはやっていけない」と別れを切り出された。

落ち込んで実家に戻ると、「そんな馬鹿な事で帰って来るな」と追い返された。

ここまで馬鹿だ馬鹿だと言われてしまうと、生きる希望を失ってしまう。

死ぬしかなかった。

水がどんどん深くなっていく。腰にまで達した。流れが速くなり、足を取られそうになる。

水の冷たさも増している様感じた。

――これなら問題なく死ねるな。

その時、背後から声がした。

「おい、あんた、何してる？」

本郷浩は返事すべきか、それとも無視すべきか迷った。

完全に無視すると邪魔されそうだったので、

「ほっといて下さい」

と、振り返る事無く答えた。

「馬鹿な真似は止めろ！ 死ぬぞ！」

死ぬ直前だというのに、馬鹿と呼ばれてしまった。

馬鹿と呼ばれる運命にあるらしい。

「だからほっといて下さい」

「馬鹿な真似は止めるんだ！」

その声と同時に、バシャバシャと水を掻くような音がした。追って来たらしい。

本郷浩は舌打ちした。お節介にも程がある。

――何故どいつもこいつもどうでもいい時に俺に関わろうとするのか。関わってくれ、という時は完全に無視するくせに。

前進のペースを速めた。

「おい、待て！」

と、背後から声がする。

本郷浩はその声を聞き流した。水は、脇の辺りにまで達していた。必死に前に出ようとするが、水の抵抗が大きい。落ちている体力をますます消耗するだけになってしまっている。

「待てと言っただろうが！」

……の怒声と共に、本郷浩は背後からがっしりと掴まれた。

本郷浩はびっくりした。まさか相手がここまで追って来るとは予想していなかったのだ。

「は、放せ！」

と、思わず叫んだ。

「放す訳ないだろうが。早まるんじゃない！」

「ほっといてくれ！」

「何があったのか分からないが、死ぬ事はないだろうが！」

——死ぬ事があるから今ここにいるんだ。

「ほっといてくれ！」

「馬鹿な事はするんじゃない！」

本郷浩の頭に血が上った。

賢くないのは事実だ。賢かったらこの場にはいない。しかし、冥土へ経つ一瞬前まで馬鹿と呼ばれたくはない。

バツと振り向くと、

「俺は馬鹿じゃない！」

と叫び、拳を振るった。

拳は、相手の頭部を直撃した。

本郷浩は、若い時から身体を鍛えていた。腕力は見かけ以上にある。

また、相手は、予想以上に小柄な男だった。体格的には子供同然である。こんなチビがどうやって俺を羽交い絞めにしたのか、と本郷浩は驚かずにいられなかった。

「グワッ」

と、相手のもんどり打った。「馬鹿な事は止めろ！」

「俺を馬鹿と呼ぶな！」

本郷浩は再度拳を振るった。

相手の鼻が熟し過ぎたトマトの如く潰される。

「馬鹿な事するんじゃない！」

「俺を馬鹿と呼ぶなど言ってるだろがああああっ」

と、本郷浩は叫びながら、拳を振るい続けた。「俺は馬鹿じゃないぞ！ 馬鹿じゃないぞ！
馬鹿じゃないぞ！」

「お、おい、馬鹿！ 何やってる！」

別方向から声がした。

本郷浩は、その方向に眼を向ける。

岸边に中年男性が立っていた。川に入る勇気はないらしい。

――へっぴり腰め。

「ば、馬鹿！ 何やってるんだ？！」

誰からも馬鹿と呼ばれる運命の様だ。

「ほっといてくれ！」

その時、メタボリックシンドローム気味の制服警官が駆け付けた。

「どうした？」

中年男性が僕を指すと、

「馬鹿でかいのが小さいのを痛め付けているんです！」

制服警官は、本郷浩に向かって、

「おい、馬鹿な事は止めろ！」

「俺を馬鹿と呼ぶなと言ってるだろがああああっ」

と、本郷浩は喚きながら、川から猛ダッシュで這い上がると、制服警官に向かっていった。

名前も知らない小柄な男は、本郷浩の拳を何発も食らった事から脳挫傷となり、二時間後に搬送された病院で死亡した。

最期の言葉は、「こんな馬鹿な……」だったとか。

本郷浩は、当初は暴行罪で逮捕されたが、殺人罪に切り替わった。

公判では、国選弁護人が全くやる気を示さなかった事もあり、早々と有罪判決が言い渡された

。

刑は、最近導入されたばかりの終身刑。

判決言い渡しの際、裁判官に言われた。

「こんな下らない事で人を殺めたお前は底無しの馬鹿だ。死刑にすべきだが、一人しか殺めていないので、止むを得ず終身刑にした」

国選弁護人は、判決が早々と終わってくれた事に安堵した。

「上告なんて馬鹿な事はしないで、さっさと受け入れた方がいい。では、私はこれで」

本郷浩がその国選弁護人を見たのは、それが最後だった。

結局、本郷浩は網走刑務所に送られた。

刑務所の陰気な正門が眼に入った時点で思った。

こんなところに入るなら死んだ方がマシだ、さっさと死ねなかった俺は底無しの馬鹿だ、と。

輸送車が止まる。

扉が開けられた瞬間に、痩せっぽちの警備員が言う。

「さっさと出る、馬鹿」

「馬鹿馬鹿言うな、ての」

と、本郷浩はぼやくと、その警備員を一撃で撲殺した。

御手洗家の子供たち

御手洗正治は歡喜の涙を流していた。

「やっと子に恵まれたぞ！」

妻の花子も嬉しさのあまり泣いていた。

「しかも二人もだ！ 良かった、良かった！」

花子の腕の中では、つい先日生まれたばかりの双子がすやすやと眠っていた。

片方は男の赤ん坊で、もう片方は女の赤ん坊だ。

二卵性双生児だったのだ。

「やっと授かった子供だ。何が何でも幸せになってほしい」

「そうですね、あなた」

「しかし残念ながら、我が家は呪われている」

花子の顔面が蒼白になった。

「呪われている？」

「そうだ。この名前のお陰でな。御手洗。必ず『便所』とかいったあだ名を付けられ、虐められる。俺もそうだった。御手洗正治、て名前から『便所掃除』とよく呼ばれた」

花子の顔色から血の気がますます失せる。

「そ、そうだったんですの？ どうしましょう？」

「だから我が子には幸運と叡智に恵まれる名を付ける」

「そうですか。何という名前にするんです？」

「運智と運子だ」

「ウンチとウンコ？」

「運と叡智を授かるように、と願いを込めている」

「で、でも！ 御手洗運智と運子なんて名前になったら、ますます虐められます！」

「虐められるものか！ 『運』が付いているのだぞ！ 幸運に恵まれる名前だぞ！ ところが悪い？」

「でも……、ウンチとウンコじゃないですか」

「そうだ！ 運智と運子だ！ これほど幸運と叡智にこだわった名前はない！」

「こだわっていると言っても……。虐められます！」

正治は妻に張り手を浴びせた。

「馬鹿者！ 幸運と叡智にこだわった名前なのに、虐められるものか！」

「ですけど……」

「運智と運子だ！ 何が何でもこれにする！ この名前で、我が子は我が家の呪いから解き放たれるのだ！ これで御手洗家は安泰だ！ 良かった、良かった！」

役所は、名前の受付を一旦拒否したものの、御手洗正治の強硬な姿勢に折れ、受理した。

一五年後、御手洗正治・花子夫婦は、自分らの名前を呪う鬱気味の双子の子によって惨殺された。

加害者は未成年だった為、名前の公開は控えられたが、ネットで流出。

世間は、御手洗正治・花子夫婦を「稀代の馬鹿親」と冷笑する事になる。

いつの時代も、名前にこだわり過ぎるとろくな目に遭わない。

暴走する正真正銘のアホ

俺は朝、目を覚ました。

いつも通りの朝……。

……ではなかった。

釘を打ち込まれても涙を流さない程気丈な筈の母が、布団の隣りに座ってメソメソと泣いていたのだ。

俺は飛び起きると、

「ど、どうした？ 何かあったのか？」

「ご、ごめんなさい」

「何の事だ？」

「これまで隠してたんだけど……」

「何を？」

「あんたがアホだった、て事を」

「何い？」

母は号泣した。

「ごめんなさい、これまで隠していて。あんたはアホなの。正真正銘のアホなの」

俺は腹が立った。当然だろう。実の母にアホと呼ばれて喜ぶ馬鹿はいない。

「朝っぱらから下らない事言うな」

俺はキッチンに入った。

父がいた。メソメソと涙を流していた。父が涙を流すのを見るのは生まれて初めてだ。びっくりした。

「どうした、親父？」

「すまない」

「何の事だ？」

「これまで隠していた。しかし、もう隠せない。だから言おう」

「何を？」

「お前は、お前は……アホなんだ！」

「な、何を言ってる？」

父は土下座した。

「すまなかった。お前はアホなんだ。正真正銘のアホだ。許してくれ。この愚かな父を許してくれ！」

俺は顔をしかめた。父も母もどうかしている。

「はい、はい、分かった」

と、俺は適当に言うと、冷蔵庫を開けた。

姉がキッチンに入った。真っ平らの、女としての魅力に完全に欠ける体型だ。

姉は、俺の姿を見て足を止めた。顔色がみるみる悪くなる。

「どうした、姉貴？」

「あ、アホ……」

俺は姉貴に色々言われた事がある。馬鹿とか、間抜けとか、頓馬とか。無論、アホと呼ばれた事もある。しかし、ガキの頃の話だ。最近はそんな風に呼ばれた事はない。

「アホが何だよ？」

「あんた、自分がアホだ、て知ってるの？ 正真正銘のアホだ、て」

「知らねえよ！ どうしたんだ、みんな？」

姉は大粒の涙を流した。俺をしっかりと抱きしめると、

「これまで馬鹿とか間抜けとか言ってごめんね。本当はアホだったのに。アホを馬鹿と呼んだのは間違いだった」

俺は姉を押し返すと、

「馬鹿な事言うなよ！」

「本当にごめんね」

「馬鹿な事言うな、ての」

ふと見ると弟がいた。視線が合う。

「ヒイイイイイッ」

と、弟は悲鳴を上げ、逃げた。「アホだ、アホだ、アホだ！ 正真正銘のアホだ。アホは遺伝だぞ！ 俺もアホの可能性が高いぞ！ そんなの嫌だ！ アホは嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だあっ！」

俺は無性に腹が立った。自分が賢くないのは認める。しかし、大学は三流ながらも卒業しているし、中企業ながらも就職し、まずまずの収入を得ている。来月はアパートで一人暮らしを始めるつもりだ。アホ、アホと呼ばれる程無能ではない。

「お前ら、馬鹿か？」

と、思わず叫んだ。

「アホは嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！」

——お前はとっくにアホだよ。

出勤前に散歩でもするかと俺は考え、外に出た。

近所のお節介オバサンと鉢合わせする。

俺が挨拶しようとする、お節介オバサンは、

「お気の毒に……」

「え？ 何の事で？」

「あなた、アホなんでしょ？ 正真正銘のアホなんでしょ？」

俺は開いた口が塞がらなかった。

——馬鹿か、このオバン？

「だ、誰がそんな事を言ったんで？」

オバサンはメソメソと泣くと、

「可哀想に。あなた、アホだから、て絶望したら駄目よ」

——張り倒されたいのか、このオバン？

お節介オバサンは俺の両肩を掴んだ。

「人間、生きていれば希望はあるんだから。分かった？ アホにも希望はあるの。アホだって幸福になれる。大丈夫よ」

俺は自宅に駆け戻った。

* * *

俺は、「アホに産んだ事を許して！」と泣き叫ぶ母を後に、出勤した。

勤めている会社のあるビルに入る。

「あの……」

と、声がした。

俺は振り向いた。

杏子だった。経理課にいる。一年前から付き合い始めた女だ。結婚も考えている。胸がでかい。彼女のパイ擦りは天下一品である。

俺はホッと息をすると、

「ちょっと聞いてくれよ。家の連中とさ、近所の連中がおかしくて……」

杏子は頭を深く下げると、

「ごめんなさい」

「え？ 何の事？」

杏子は顔を上げた。目が涙で一杯だ。

「ごめんなさい。あたし、アホとはどうしても付き合えないの」

——お前、ブッ飛ばされたいのか？

「ど、どういう意味だ？」

杏子は大粒の涙をこぼした。

「アホを差別しちゃいけないのは分かってる。理屈では分かってるんだけど……。でも、でも…
…駄目なの。ごめんなさい。あなたはいい人よ。でも、でも、アホは……ごめんなさい！ 本当
にごめんなさい」

……の言葉を残すと、杏子は走り去った。

俺は呆然と立ちすくんだ。

* * *

俺は自分のデスクについた。杏子にふられたショックから立ち直れないでいる。これといった理由もなくふられたのだ。立ち直れたらおかしい。

——どうなってるんだ、一体？

同僚の吉中が近寄り、

「おい」

「何だ？」

「何故俺に隠してたんだよ」

「何を？」

「お前が正真正銘のアホだった、て事を。それくらいで俺との友情が崩れるとでも思っていたのか？」

——馬鹿か、こいつ？

「お、俺はアホじゃない！」

吉中は顔を真っ赤にして、

「俺を信用出来ないのか？」

「し、信用も何も！ 俺はアホじゃないんだ！」

吉中は聞いていなかった。

「俺を信用出来なかったのか。残念だ。正真正銘のアホだからといって……」

——こいつは確実に馬鹿だ。

「ちょっと」

と、声が上がった。

ふとその方向に目を向けると、上司の沢村がいた。俺を手招きしている。

俺は沢村に近寄り、

「何でしょう」

「今日、君が行く商談だったんだが……」

「準備は万端です」

と、俺は自信満々に答えた。

「実は言うと、君には行ってもらいたくないんだ」

「なぜです？ この商談は私がまとめて……」

「そうなんだが……。君は、その、アホだろ？ アホだからといって差別するのは良くないのは知っているが、相手側の印象を悪くしては……」

——こいつまで馬鹿になっちゃった。

「私はアホじゃありません！」

「認めたくないのは分かる。しかし、事実は事実として認めなければ。君がアホだという事を。しかもただのアホではなく、正真正銘のアホ」

「俺をアホと呼ぶのは止める！」

と、俺は叫ぶと、沢村に拳を振るった。

(バキッ)

沢村は顔面にフックを食らい、尻餅をついた。

「お、落ち着いたまえ。アホー—正真正銘のアホー—だからといって、君を解雇する等の処分を下すつもりはない。ただ、会社として、考える余裕を……」

「俺はアホじゃねえんだよ！」

俺は沢村に蹴りを浴びせた。

(ドスッ)

「よ、よしたまえ！ アホー—正真正銘のアホー—だからといって、絶望する事は……」

「俺はアホじゃない！」

俺は、沢村に蹴りを何十発も浴びせた。

(ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ、ドスッ……)

周囲が騒がしくなった。

「アホが沢村に暴行を加えてる」

「アホの暴走だ」

「アホを取り押さえろ」

「アホを取り押さえようとして怪我をしたらアホが移るのでは？ 血液感染するんだろ？」

「アホは空気感染もするのでは？」

「じゃ、我々もアホを感染したのか？」

……等の発言が耳に入った。

「俺をアホと呼ぶな！」

と、俺は吼えると、手当たり次第にものを投げ付けた。「俺はアホじゃない！ アホじゃない！ アホじゃないんだ！」

社内は騒然となった。男女問わず悲鳴を上げながら逃げ回る。

「アホの暴走だ！」

「アホが暴れてる！」

「気を付けろ！ アホを感染するぞ！」

六人の警官が到着した。全員が銃――六連発のニューナンプ回転式拳銃――を、構えている。

「おい、落ち着け」

と、警官の一人が言う。

「落ち着いてもらいたいなら、俺をアホと呼ぶのは止せ！」

「君が正真正銘のアホだという事で絶望的になっているのは理解出来る。辛いのも分かる。事実を事実として受け入れたくないのも分かる。しかし、人生を投げ出すな。正真正銘のアホでも普通の暮らしが出来るんだ。……出来ると思う。専門家に聞いてみないとハッキリした事……」

警察にまでアホと呼ばれて、いい気分になれる訳がない。

「俺はアホじゃねえ！」

「落ち着け！」

「それなら、俺をアホと呼ぶのは止せ！」

「分かった、分かった。もうアホと呼ぶのは止そう」

隣の若い警官が、小声で年長の警官に、

「アホをアホと呼べないなら、どう呼ぶんです？」

「馬鹿は？」

「アホと馬鹿は全く違います。馬鹿に失礼でしょう」

「間抜けは？」

「アホと間抜けも全く異なります。間抜けに失礼です」

「アンポンタンは？」

「アホとアンポンタンも全く違います。アンポンタンに失礼ですよ」

「……じゃ、アホと呼ぶしかないなあ」

「俺はアホじゃない！」

と、叫ぶと、飛びかかった。

「ヒイイイッ。アホに殺される！ ヒイイイッ」

警官らはニューナンプを発砲した。

* * *

「……本日、アホが暴走する事件がまた発生しました。会社員の二四歳の男性です。駆け付けた警官が発砲した三八発の銃弾により射殺されました。警察は、死亡者が出たのは残念だが、妥当な対処だった、との声明を出しています。この件について、総理大臣がコメントを出したので、お聞き下さい」

記者：今日、またアホが暴走しましたが、この事について総理はどう思います？

総理：悲惨な事件だ。正真正銘のアホだからといって暴走するとは……。こういう事が二度と起こらないよう、対策を取らなければならない。

記者：アホを集めてどこかに収容するとか？

総理：具体的な対策に関して現在全閣僚を招集して協議している最中なので、コメントは現段階では避けたい。

「……本日の事件について、野党の社*党党首は次のようにコメントしています」

社*党党首：正真正銘のアホでも人間である事には変わりません。人権があります。差別してはなりません。また、政府は正真正銘のアホを適切に保護し、治療する義務があります。正真正銘のアホを野放しにした政府や与党の対応には疑問を感じます。我が党は、今国会で、アホ対策の為の特別予算を編成する事を要求し……。

「……アホの問題は全世界に拡がりつつあります。国際的な対策が必要とされる段階にまで至っているようです。残念ながら、正真正銘のアホは永遠に不滅のようです」

* * *

はっきり言いましょう。

この下らない本編を最後まで読み切ったあなたもアホです。正真正銘の。